

金子助教授「商の

差別発言を糾弾する。

Ⅰ 事実経過

去るの月、日、部落研究会が家政学部前々学生、教職員に対し、部落研究関係「雑誌展覧」と「二次科目」並宣言、講義を配り、差別を許さぬ教育を確立するに、署名活動をして、たこも、金子助教授が助教授は、会員に対し、「吾達は部落問題を解く活動してゐるのか。市大も無差別地帯に、部落はそれ以上に無差別地帯だ。部落に一般の人間が入つてゐたわけ、部落民は差別に苦しみ、部落に入ることも、眼を瞞かせるに、（アイクチ）がサリ、この「No」と述べた。彼のこの発言に対し、部落研究会は抗議し、発言の差別性を指摘したのは当然の事であつた。彼は尼崎市の福祉協議会の役員で、部落を身近に見てゐるにもかかわらず、更にまた「部落問題は大学問題以上に複雑で難しい問題だ」と語つてゐるにもかかわらず、この発言の差別性に気付いてゐない。我々部落研は、彼の発言を無知として終らせることのできない。畢竟は差別発言と看する。彼の発言は、部落差別の事実とその原因を覆ひかくし、部落差別の犠牲者たる部落住民に一切の責任を転化し、部落解放同盟の中核とする部落解放運動に水をさすものである。何となくいへば、「民主主義」「日本の思想表現の自由」といつたもののねのか？ 我々部落研は、部落差別をはじめ、全ゆる差別に対して、差別を許さぬ自由などとは絶対に許せないと考へる故に、教育者にとつてあるまじき彼の発言に対して、激しい怒りをもつて糾弾するものである。以下、彼の発言の差別性を指摘する。

Ⅱ 発言の差別性は何処に

先づもつて、彼の発言内容の「無差別地帯」の事実に確めねばならぬのはもちろんの事だが、それは事実としても、事実を指摘する以上では差別に過ぎない。

いふ事は彼には理解できない。部落に対する偏見は満ちあふれてゐる現代社会に生存してゐる、部落問題の理解の遅れてゐる人々。偏見に毒されてゐる人々に対して、この様な発言が投げかけられれば、更に一層部落に対する偏見に拍車をかけ、部落差別を拡大再生産する役割を果し、部落解放運動に水をさすことは、陽を思ふよりも明らかではないか。部落問題を語る場合には、事実の如く述べるのではなく、なぜか、なつたのかを述べなければ、客観的には部落差別を温存し、助長する役割を果すことになるのだ。彼の言葉からは、彼が部落を解放しなければならぬと幾度者でも融和主義運動しかでこゝないのは自明の理である。なぜなら、彼は部落差別の事実と原因を覆ひかくし、現象的にしか物事を捉えず、犠牲者である部落民に、その一切の責任を転化し、押しつけるからだ。

部落差別は封建的支配権力の、人民搾取の爲め、分裂と諷刺の爲め政策として、その発生と身分制（今川義元の時代）に求められる。江戸時代の士農工商・エタ・非人の厳しい身分制度、明治維新を経て、明治四年「エタ解放令」が出されたにもかかわらず、翌三年に壬申の幕に於て「新平民」とされ、新しく差別とともなふ権力者はつくつたのだ。それ以来、このかた一片の法律もつぐらば、又、部落の解放の爲の施策をワボつてきたのは、粉れもなく権力者であつた。この権力的支配の愚を考へるとき、その結果（差別政策の結果）を一方的に部落民の責任に帰す思想こそ、まさに権力者・差別者の生み出したものだった。この権力者の思想と彼の発言と違つてゐるはない。

↑ウツヘ↑

部落研了ぜーハ

その結果、部落問題に対する差別的態度は、一部の人々には、部落問題（？）をもつて、部落全体に於ては、部落民を差別視し、部落民を無学の徒として、きめつけ、あげくの果て、市人の現状と比較して、いかに劣るものか、という態度は、エライ、という事と、輕蔑、は、一體をなしているのだ、という事を端的に物言ひ（SPEAKING）。

大内氏（氏名）は雑誌「世界」三月号で、「大内氏」の特長記事の標題を「……」といつて、大内氏の態度を部落に於ける事を想定すれば、日本に於ける一切の愚・徹頭徹尾、暴行、虐待を自己防衛しても語り切れぬもの（部落）といふ言葉で置かざる差別の知識だけは、金（氏）も例外ではなかつたのだ。以上が彼の発言の差別性なのであり、我々が自己批判を求めた点である。（付、大内氏は、解放同盟の糾弾により、自己批判し、岩波書店は「世界」を回収した。）

四 彼の発言を容認してき

たのは商教授会である。

では何故彼をして、差別的発言をさせてあげたのか。それは、商学部が部落問題に対して、何らの取り組みもしてこなかつた事に起因する。もし、商学部が取り組んでいたら、この種の発言は生じなかつたであらう。更に、その原因を深く考へるならば、そのような商学部教授会の態度を「学部自治」の美名の下に黙認してきた大学協賛会に根本原因がある。商学部は我々が41年以来二年を費して出した部落問題科目（社会計画論）に対して、我々の要求（社会科学系、ワーク内単位）とは、遠く差別的決定（人文科学系、単位なし）を下し、42年度開講を不可能にした張本人である。我々は、何らの自己批判もせずして、この差別的決定を撤回し、社会科学系ワーク内単位とした商教授会の事ばかり主義・場当たり主義・偽善性・糾弾し、二重の意味の自己批判を要求するものである。

Ⅳ 商教授会は部落産業の保護・育成の課題を講義に取り入れよ。

今度の差別事件を契機とし、真の要因をメーソンの要因にまで追いついて、真の自己批判の内容である。商学部教授会が認めてこつて、自己の責務を果せることを述べねばならぬ。部落問題の解決の為に、商学部として取り組むべき課題は大阪の企業連合会（部落の中小企業を保護育成の為に組織）の運動を参考に、部落産業をはじめとする中小企業の保護育成を中心とする経営学・財政学を研究し、教育することである。その事は、部落大衆はもとより、中小企業に働く人々の切実な要求である。

市民の血税で賄われている市大で、勤労者・人民の要求に施せる教育・研究を行なう義務・責任を商学部はもとより、大学当局もまた痛感すべきである。その学問研究の成果を市民に還元しなければ、大学の社会的役割を果してないといふことになる。我々部落問題研究会は、部落問題を通じて、大学当局に対して、我々の要求を貫徹させ、大学当局に部落問題を取り入れさせ、実践させることにし、社会的使命を果させていくであらう。たゞ、その過程に彼等（？）は、いかなる困難があつても。

我々は、部落解放同盟と連帯し、クラス・サークルと共に、大学の教育革新の為に、市大である。全市大の学友諸君、院生・助手・教職員諸君、差別を許さぬ教育・研究の内容と体制を構築してゆいては、いか。尚、金子氏の部落解放に関する見解（地域解放論）に対しては、次号で反論する。

力。△主として助教教授の差別発言口を糾弾する。力。部落問題研究会の組織力もなかつた商教授会は自己批判せよ。知。大学当局は自己批判し、部落問題科目の完全化を實現せよ。知。部落産業の保護・育成の課題を経営学・財政学で扱え。